



三重大学

医学部

No.195 2025.10.1

News

目 次

トピックス

7月28日（月）医学部研究フェスティバルが開催されました…………… 2

学会だより

アフリカ連合デー祝賀会を開催しました…………… 神谷 元… 3

第65回日本先天異常学会学術集会 最優秀ポスター賞を受賞して…………… 八十島左京… 5

第255回日本内科学会東海地方会若手優秀演題賞を受賞して…………… 中野 咲子… 6

第61回日本小児循環器学会総会・学術集会開催報告…………… 三谷 義英… 7

第61回日本小児循環器学会総会・学術集会

Young Investigator Award、AHA presenting awardを受賞して…………… 坪谷 尚季… 9

第46回日本炎症・再生医学会 優秀発表賞…………… 細見 謙登… 10

第68回関西胸部外科学会学術集会開催報告…………… 川口 晃司… 11

第57回日本医学教育学会 Best Student Awardを受賞して…………… 関部 純怜… 13

日本化学療法学会Young Challenger Awardを受賞して…………… 朝居 祐貴… 14

一般社団法人日本医療薬学会 第98回医療薬学公開シンポジウムを開催して…………… 岩本 卓也… 15

第56回日本臍臓学会大会若手award最優秀賞を受賞して…………… 田辺紗弥香… 16

学位記授与式…………… 17

トピックス

7月28日（月）医学部研究フェスティバルが開催されました

7月28日（月）医学部研究フェスティバルが開催されました。これは医学部における研究促進を目的として、突出した研究や異分野融合につながる発展性・将来性のある研究テーマについて募集するもので、第2回目の今回は26件の応募がありました。

当日は審査の結果、特に優秀だった研究合計6件が発表を行い、意見交換も活発に行われました。これら6件には、アワードとして研究費が配分されました。



- 医学部におけるこれまでの実績を踏まえ、突出した研究テーマや、異分野融合につながり発展可能性のある研究テーマを募集し、上位6テーマ（基礎2件、臨床2件、看護2件）の発表を行います。（発表者・発表テーマは後日発表）
- 当日は、医学部執行部による審査のほか、来場いただいた方々の投票を踏まえ、順位を決定します。
- 交流会・表彰式では軽食をご用意しております。
- 他学部の先生方、職員の方、どなたでもご参加いただけます。

○基礎講座部門

修復再生病理学 橋詰 令太郎

「ゲノム編集技術の過剰染色体消去への応用」

分子生理学 山川 大史

「間葉系前駆細胞の脂肪細胞分化における臓器多様性の理解」

○臨床講座部門

産科婦人科学 真川 祥一

「放射線科、工学部とのコラボレーションにより胎児の低酸素および周産期リスクの客観化・可視化に関する研究」

消化器内科学 藤原 直人

「分子学的ラジオミクスによる肝細胞癌の個別化薬物療法の開発」

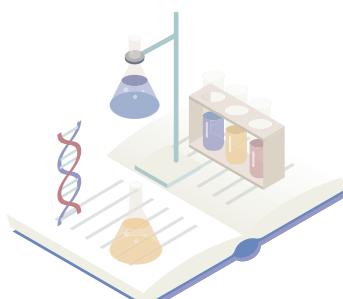
○看護講座部門

成人看護学 船尾 浩貴

「バーチャルリアリティを応用した在宅リハビリテーション促進策の開発」

実践基礎看護学 松裏 豊

「ICU入室患者における新たなせん妄発症予測因子の検討－下肢末梢循環に基づくアプローチ－」



アフリカ連合デー祝賀会を開催しました

公衆衛生・産業医学・実地疫学分野 神 谷 元

2025年5月27日夕刻、三重大学 公衆衛生・産業医学・実地疫学分野セミナー室にて、アフリカ連合デーを祝うインフォーマルな集まりが開催され、無事に終了しました。本イベントは、文化交流と連帯の促進を目的として行われました。

アフリカ連合デー (African Union Day) は、アフリカ諸国が連帯と統一を祝う記念日で、毎年5月25日に祝われます。これは、1963年にアフリカ統一機構 (OAU) が設立された日を記念するもので、現在のアフリカ連合 (AU) の前身です。アフリカ連合は、アフリカ全体の平和・統一・発展を目的とした国際組織で、55の加盟国があります。アフリカ連合デーは、アフリカの歴史、文化、多様性への理解を深めるとともに、アフリカ出身者の誇りを共有する日でもあります。

本イベント参加者は多様で、公衆衛生・産業医学・実地疫学分野の教職員や大学院、研究室研修、新医学専攻コースの学生のほか、環境分子医学分野の職員、学内のさまざまな専攻のアフリカ出身の留学生、そしてMie Projectの部員が集まりま

した。

セミナー室にはアフリカ音楽が流れ、参加者はリラックスした雰囲気の中で交流を始め、自己紹介を行いました。開会の挨拶は、公衆衛生・産業医学・実地疫学分野の教授である神谷元が務め、イベントの趣旨を説明し、異文化間のつながりの重要性について言及しました。その後、講座スタッフであるElijah Kuurdor (ガーナ出身) がアフリカ連合デーの意義について解説しました。

会場ではピザやさまざまなフィンガーフードが提供され、参加者に好評でした。イベントの目玉となったのは、コンゴ民主共和国、ケニア、ガーナ、ザンビア出身の代表者によるプレゼンテーションで、それぞれの母国の観光名所や食文化、独自の文化的な話題が紹介され、参加者の異文化理解が深まりました。その後も音楽と自由な歓談が続き、参加者同士の交流とネットワーキングが促進されました。

最後には感謝の言葉とともに集合写真が撮影され、このイベントを象徴する「団結」と「友情」





の精神がしっかりと記録に残されました。来年度以降もぜひこのような機会を持ちたいと思います。興味のある方は、ぜひご一報ください！

An Informal Celebration of African Union Day Was Held

On the evening of May 27, 2025, an informal gathering was successfully held at the Seminar Room of the Department of Public Health, Occupational Medicine, and Applied Epidemiology at Mie University to celebrate African Union Day. The event aimed to promote cultural exchange and solidarity.

African Union Day, celebrated annually on May 25, commemorates the founding of the Organization of African Unity (OAU) in 1963, the predecessor of today's African Union (AU). The AU is a continental organization comprising 55 member states, dedicated to promoting peace, unity, and development across Africa. The day serves to enhance understanding of African history, culture, and diversity, while also fostering pride among people of African origin.

The event brought together a diverse group of participants, including faculty and graduate students from the Department of Public Health,

Occupational Medicine, and Applied Epidemiology; students enrolled in laboratory training and the New Medical Science Course; staff from the Department of Environmental and Molecular Medicine; African students from various academic disciplines; and members of the Mie Project.

As participants entered the seminar room, African music played in the background, creating a relaxed and welcoming atmosphere for introductions and mingling. The opening remarks were delivered by Professor Hajime Kamiya, who leads the Department of Public Health, Occupational Medicine, and Applied Epidemiology. He explained the purpose of the event and highlighted the importance of intercultural connections. This was followed by an explanation of the meaning of African Union Day by Dr. Elijah Kuurdor, a staff member of the department originally from Ghana.

Attendees enjoyed pizza and a variety of finger foods, which were well-received. A highlight of the event was a series of presentations by student representatives from the Democratic Republic of Congo, Kenya, Ghana, and Zambia. They introduced tourist attractions, culinary traditions, and unique aspects of their cultures, deepening participants' cross-cultural

understanding.

The evening continued with background music and casual conversation, encouraging further interaction and networking among attendees. The event concluded with words of thanks and a group photograph that captured the spirit

of unity and friendship symbolized by the celebration.

We hope to continue hosting such events in the years to come. If you are interested in joining or supporting future gatherings, please feel free to reach out!

第65回日本先天異常学会学術集会 最優秀ポスター賞を受賞して

統合薬理学 八十島 左京

この度、2025年7月25日（金）～2025年7月27日（日）にシンフォニアテクノロジー響ホール（伊勢市）にて開催されました第65回日本先天異常学会学術集会において最優秀ポスター賞をいただきましたので、謹んでご報告を申し上げます。演題名「ゼブラフィッシュを用いたSnijders Blok-Campeau症候群モデルの病態解析」

以下に研究内容について簡単にご紹介申し上げます。

クロモドメインヘリカーゼDNA結合タンパク質3（CHD3）は、クロマチンリモデリングに関与し、Snijders Blok-Campeau症候群（以下本症）の原因遺伝子です。私たちは本症モデルゼブラフィッシュを作成し、その行動異常と臨床表現型との類似とともに、ゼブラフィッシュ脳メタボローム解析の病態メカニズムにミトコンドリア機能異常の関与が示唆されることを報告しました（Y Enomoto, S Yasojima, et al, Eur J Hum Genet. 2025）。今回、病態解析をさらに進めるべくゼブラフィッシュ脳を用いた生化学的実験を行いました。結果モデルゼブラフィッシュではNAD⁺/NADH比に異常があることが明らかになり、メトホルミン投与によってその異常が軽減される可能性が示唆されました。本症の病態メカニ

ズムに関して新たな知見を得ることができました。今後、CHD3とNAD⁺/NADH比との関係やメトホルミンの作用点などについてもさらに実験・解析を進めることで本症の分子的な病態メカニズム解明・治療法開発につながり得ると考えます。

私は本学医学部医学科5年生であり、1年次より西村有平教授が主宰される統合薬理学分野にて新医学専攻コースに在籍する学生として活動をさせていただいております。今回、臨床実習の合間



を縫って実験を行い、このような興味深いデータを得ることができました。実習スケジュールを調整して行いましたが、失敗すると再調整が必要となることからいつも以上に緊張感を持って実験・解析に臨んだことが功を奏したのかもしれません。本症の分子的な病態メカニズム解明にはさらなる実験・解析が不可欠です。今後も微力ながら本研究に携わっていきたいと存じます。本受賞を励みに日々の臨床実習、研究活動や勉学により一層精進して参ります。

最後に、本研究にご協力いただきました患者様とそのご家族様に深い敬意と感謝を申し上げますとともに、本受賞に際しご指導を賜りました西村有平教授、白水崇助教をはじめとする統合薬理学分野の方々、共同研究者の黒澤健司先生、榎本友美先生をはじめとする神奈川県立こども医療センターの方々、日頃支えてくれている友人、先輩、後輩、家族にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

第255回日本内科学会東海地方会若手優秀演題賞を受賞して

代謝・内分泌内科学 中野咲子

この度、2025年2月16日に名古屋市で開催されました第255回内科学会東海地方会におきまして、発表演題「自己免疫性胃炎の経過中にケトーシスを伴う1型糖尿病を発症した多腺性自己免疫症候群3型の1例」が若手優秀演題賞に選出されましたので、ここにご報告申し上げます。



多腺性自己免疫症候群 (autoimmune polyglandular syndrome : APS) は副腎皮質を中心に複数の内分泌臓器に対する自己免疫疾患を合併する疾患群であり、1-4型に分類され、APS3型は自己免疫性甲状腺疾患に1型糖尿病や悪性貧血、白斑・脱毛症などを合併し、特発性Addison病を合併しないタイプと定義されています。本症例は長期間の自己免疫性胃炎の経過中に1型糖尿病を発症し、甲状腺自己抗体陽性の潜在性甲状腺機能低下症も併発していたことから、APS3型と考えられました。HLA遺伝子型の解析では、日本人で報告されたAPS3型と1型糖尿病に感受性のある遺伝子型が認められ、両疾患への関与が推測されました。

日本人1型糖尿病患者に自己免疫性甲状腺疾患を合併する頻度は8.8%であるのに対し、悪性貧血を合併する頻度は0.2%と非常に低いとされており、稀な症例を経験しました。APS3型の病因は未だ十分に明らかにされておらず、HLA遺伝子型などを含めた詳細な検討を加えた報告例の集積が待たれるところです。

今回の発表にあたり、ご指導いただきました矢

野裕客員教授をはじめ、多くの方々にご助力いたしました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

第61回日本小児循環器学会総会・学術集会開催報告

三重大学医学部附属病院周産母子センター病院教授 三 谷 義 英

第61回日本小児循環器学会総会・学術集会を、2025年7月10日～12日の3日間、三重県津市・三重県総合文化センターにて開催致しました。三重県で初めて本学術集会の開催となり、関係各位に感謝致しますとともに、ご協力、ご参加の方々に御礼申し上げます。お陰様で、2038名（うち海外から40名）の方々の参加登録を頂き、無事終了しましたことをご報告致します。

【本学術集会のテーマ】

本会のテーマは「小児循環器学、医療と保健の未来を紡ぐ：New Paradigm, Networking and Inclusiveness for Children and Beyond」です。小児循環器および成人先天性心疾患の医療・保健課題を新たな視点から捉え、枠にとらわれないネットワーク形成を目指し、患者中心の包括的医療を推進することとしました。

【プログラムの概要】

全国学会の年次学術集会の企画に際して、以下の5点に焦点をあてました。会員による一般演題等で研究発表に加えて、①時代を先取りする先進的な話題提供、②本学会の特徴である小児科、外科と多職種の連携した集学的な特別企画、③国内

外の学会とのジョイント企画、④若手・専門医育成の教育企画、⑤学会の国際化の試みです。それらを旨に、学術的に実りのある会を目指して鋭意準備を進めてきました。実際のプログラムは、特別講演：5講演（国内2・海外3）、シンポジウム・パネル・委員会企画：40企画（国内38・海外2）、ディベート企画：2企画（海外）、ジョイント企画：6企画（国内3：日本心臓病学会、日本不整脈心電学会、日本肝臓学会・日本成人先天性心疾患学会、海外3：米国循環器学会【AHA】、欧州小児循環器学会【AEPC】、台湾小児循環器学会【TSPC】、AEPCのYIAセッション（AEPC 3名、国内3名）、例年開催される特別企画：14企画、指定・招聘演者：217名（国内非会員43名・海外23名含む）、応募一般演題：700題（海外17題含む）となりました。今回は、学会の国際化とICT活用を踏まえて、海外からの一般演題応募も受け付け、特別企画・一般演題の口演で英語発表



を含むセッションは、英英、和英のキャプションを準備しました。

【特別企画について】

特別講演では、Stanford大Rabinovitch M氏によるレジェンド講演があり、Boston、Toronto, Stanfordでのご経験も含めてお話し頂きました。Geneva大Beghetti M氏による世界肺高血圧会議（WSPH）2024の小児PHガイドラインの解説と引き続くCHD-PAHのTreat & Repairのdebate session、Stanford大 池野文昭氏による起業家育成と医療系スタートアップエコシステムと引き続く産官学協同セッション、国立がん研究センター・日本Medical AI学会代表理事浜本隆二氏による医療AIの実臨床応用：研究立案から薬事承認まで、有限会社二軒茶屋餅角屋本店（ISEKADO）代表取締役社長鈴木成宗氏には、「伊勢から世界へ、樹液から食卓へ」と題して、学位研究からクラフトビール起業と国際展開についてご講演頂きました。

会長企画シンポ1では、学会のテーマ「小児循環器学、医療、保健の未来を紡ぐ：New Paradigm, Networking and Inclusiveness for Children and Beyond」と題して、守る会、学会、こども家庭庁、ICT企業、ベンチャー企業の演者の講演がありました。シンポ2では、小児期発症肺高血圧をテーマに、Stanford大Rabinovitch M氏（WSPH2024のTask Force論文著者）による肺高血圧の最新研究の基調講演がありました。シンポ3（国際シンポ）では、児童生徒の心電図検診の国際状況とデジタル化について、Duke大Idriss SF氏（FDA Think Tank論文Am Heart J 2025の著者）による基調講演、AEPC President、Blom N氏、アジアの専門家の講演があり、別日に関連した委員会企画があります。シンポ4（国際シンポ）では、Northwestern大Pei-Ni Jone氏

（Circulation誌AHA Statement2024の著者）による提言に関する基調講演、アジアの専門家の講演に引き続いて、川崎病急性期治療の初期強化についてdebate sessionがありました。パネル1、2では、それぞれ小児期発症後天性心疾患の移行期医療、重症CHDに対するbPABの遠隔成績、パネル3では、日本の小児循環器医療・研究の未来像をテーマに、海外でfacultyとしてご活躍の5名の演者（津田武氏、小林大介氏、伊藤誠治氏、佐々木奈央氏、Hong Gu氏）にご講演いただきました。

学会企画のシンポとパネルは19セッションで、川崎病研究における日本の貢献、小児不整脈の標準治療、心臓外科手術の周術期合併症対策、心臓移植適応の限界、再生医療と多能性幹細胞研究、TPVIの現状、胎児心エコースクリーニングの課題、小児期の多様な肺高血圧・肺循環障害、TOFへsurgical RVOTRと生涯管理、ACHD患者のセルフケア能力、重複障害を持つCHD患者の地域生活、Fontanの多職種への普及啓発、小児循環器領域のキャリア形成、子供の心腎連関、小児生活習慣病の治療タイミング、科研獲得、ACHDの右心不全、匠の手術の伝承、適正な肺循環と外科手術です。委員会企画は14セッションで、いのちの事業の活動報告、もう動き出している学校心臓検診のデジタル化（内閣官房担当官のPublic Medical Hubに関する講演と全国の好事例の報告）、家族支援、小循専門医セッション、HBD for Children委員会企画、生体モニターアラーム、18trisomyのCHDへの外科介入、働き方改革、CoAに対するカテーテル治療、令和8年診療報酬改定、生成AIと論文作成、研究委員会報告、心臓外科の地域拠点化、臨床試験の実装がありました。

ジョイント企画について、対海外では、AHAと小児重症心不全の外科的介入について、Young

Hearts代表Ohio大Cabrera氏による基調講演と2名の招請講演、AEPCとはCHDのIEへの集学的治療で2名の招請講演、台湾小児循環器学会

(TSPC)とはsystemic RVの管理について1名の招請講演がありました。今年の12月に香港で開催われる世界小児循環器学会会長Cheung教授をご講演頂きました。国内では、日本心臓病学会とライフステージから見た二次性心筋症、日本不整脈心電学会と非薬物治療のHot Topics、日本肝臓学会・JSACHDと話題のFALD診療の手引きの企画がありました。他の特別企画が14セッションあり、第1日目夕のサテライト研究会5企画、専門医に重要な医療倫理・安全講習会、卒後教育に関

わる標本展示記念講演と第3日目に3時間の教育セミナーBasic Course、心肺蘇生に関わる市民公開講座等でした。

【最後に】

最後になりますが、開催に際してご協力を頂きました小児科学平山雅浩教授、学会中にお世話になりました駒田美弘三重大学前学長（小児科学名誉教授）、矢田公胸部心臓血管外科学名誉教授、新保秀人胸部心臓血管外科学名誉教授、池田智明産科婦人科学名誉教授、丸山一男麻醉集中治療学名誉教授、村端真由美看護学教授に深謝致致します。

第61回日本小児循環器学会総会・学術集会

Young Investigator Award, AHA presenting awardを受賞して

小児科 坪 谷 尚 季



この度、第61回日本小児循環器学会総会・学術集会にて、2025年度のYoung Investigator Award、およびAHA presenting awardを受賞致しました。今回、2つの受賞の対象となりました研究論文は下記となります。

“C-C Motif chemokine receptor-2 blockade ameliorates pulmonary hypertension in rats and synergizes with a pulmonary vasodilator”
Cardiovasc Res. 2025 Jul 8;121 (7):1076–1090.

本研究は、CCR2 (C-Cモチーフケモカイン受容体2) 阻害が肺高血圧症の病態に及ぼす影響と、その作用が従来の肺血管拡張薬と相乗効果を持つかを検証したラットモデルを用いた前臨床研究です。CRISPR/Cas9技術によりCCR2を欠損させたラットでは、炎症依存性の肺高血圧誘発モデルにおいて、炎症性サイトカイン発現、血管内皮機能障害が抑制され、肺高血圧症が改善することを示しました。さらに、CCR2欠損ラットに対するPDE5阻害薬の投与で、さらなる肺高血圧の改善を認めました。血管平滑筋細胞を用いた*in vitro*実験では、CCR2のリガンドであるCCL2によって誘導されるPDE5の発現低下、脱分化や過増殖が、CCR2欠損によって抑制されることが示されました。以上より、CCR2は炎症関連肺高血圧症の病態に重要な役割を担っており、CCR2の抑制は炎症の抑制、血管内皮および平滑筋の表現型異常の修復を通じて作用することが示されました。特に

従来の血管拡張薬治療抵抗性の肺高血圧症患者において、CCR2阻害が新たな治療標的となる可能性が示唆されました。

受賞の場であるこの学術学会は、小児科 三谷義英先生が会長のもと2025年7月に三重県総合文化センターで開催されました。全国から小児循環器医が参加する大規模の学術集会であり、生まれ育ち学んだ三重県で行われた年次にこのような貴重な賞を受賞することが出来たことを大変光栄に存じます。当小児循環器チームでは、肺高血圧症を中心とする基礎研究、学校心電図・突然死予防

関連の疫学調査、川崎病や先天性心疾患の診断治療等、幅広い分野の研究・診療に日々取り組んでおります。診療・研究ともに成人期に関わるものも多く、各専門の先生方のお力添えを賜れますと幸いに存じます。

最後に、論文・実験指導を頂いた三谷義英先生、澤田博文先生、実臨床でサポートいただいた大橋啓之先生、淀谷典子先生、また御指導を頂きました関連の先生方に深謝いたします。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願ひいたします。

第46回日本炎症・再生医学会 優秀発表賞

形成外科 細 見 謙 登

この度、第46回日本炎症・再生医学会（2025年7月31日～8月1日、ホテルオークラ京都）にて、一般演題（ポスター発表）演題「イモリ免疫細胞を介した線維化の制御による組織再生の可能性」を発表し、優秀発表賞を受賞することができまし



た。三重大学形成外科で行っているイモリ研究内容とともに、謹んでご報告申し上げます。

発表概要：

組織への損傷刺激に対して、ヒトではきずあと（瘢痕）が線維化として生涯残り続けます。一方で、切断四肢を完全に再生できるアカハライモリでは瘢痕が生じないとされています。我々はこの通説を疑い、イモリの創傷治癒過程で本当に線維化が生じないか、について検証しました。すると、別個体からの皮膚移植（同種皮膚移植）にて移植組織下に反応性組織が誘導され、この組織は線維化としての特徴を複数有することが組織学的に確認されました。さらに、この反応性組織は時間とともに消失していくこと、自己からの皮膚移植（自家皮膚移植）ではこの反応が起きないことを見出しました。

この線維化を抑える能力のメカニズムを探るために、組織再生に必須である特定の免疫細胞に着目し、この免疫細胞阻害を上述のモデルに適応し

たところ、線維化が消失する時期においても分厚く残存することが明らかになりました。同時にこの免疫細胞の阻害はイモリの四肢再生を停止させるのみでなく、四肢切断端には部分的な線維化が生じていることを見出しました。これらの研究結果から、イモリにおいて特定の免疫細胞を介して線維化を消失させる現象自体が組織を再生するために必要な初期条件になるのではないかという仮説を導き、現在その検証を行っています。

三重大学形成外科での研究紹介：

形成外科は失った組織に対して、マイクロサージャリーなど様々な技術を用いて組織の再建を行っています。一方で、イモリは切断された四肢のすべての組織を再生できる非常に優れた組織再

生力を持つため、我々はその機序の一端を解明しようと研究に取り組んでいます。私が免疫系に、成島教授が神経系に着目しており、最終的には神経・免疫が統合されたメカニズムを解明できたらと考えています。

これまで修復再生病理学の今中恭子先生、丸山和晃先生、2024年度から当科に加わってくれた平野高大先生など、多くの先生方の協力により一歩ずつ研究を進めることができます。この場を借りて皆様に心より感謝申し上げます。2026年度から私は数年間の研究留学を予定しており、戻ってきた折にはなにかしらの形で三重大学に貢献出来たらと考えております。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

第68回関西胸部外科学会学術集会開催報告

呼吸器外科 川 口 晃 司

このたび、令和7年（2025年）6月19日（木）、20日（金）の両日に有料参加者546名を得て三重県総合文化センターの6会場、1ハンズオン会場で第68回関西胸部外科学会学術集会を開催しました。胸部心臓血管外科学教室では第11回（1968年）を故久保克行先生、第31回（1988年）を故草川實先生、第45回（2002年）を矢田公先生、第59回（2016年）を新保秀人先生と歴代教授が学術集会会長を務め、今回は高尾仁二前教授（現、松阪市民病院顧問）が心臓血管外科分野担当会長の庄村遊前病院教授（胸部心臓血管外科；現、松阪中央総合病院院長補佐）、食道外科分野担当会長の

大井正貴病院教授（消化管・小児外科学）とともに主催されました。

デジタル化、人工知能（AI）の普及に伴う医学全般、日常臨床の急速な進歩の中で個人の価値観、生活スタイル、多様性を尊重するべく、今回の学術集会テーマをWork Together and Move Forward!とし、高尾仁二大会会長による会長講



演「若い人へのYell ～自分の感受性くらい、倚りかからず～」、特別講演として佐久間肇三重大学医学部附属病院病院長による「大学病院を中心とした地域医療の諸問題と医療DX」、招請講演として田村憲久衆議院議員（自由民主党社会保障制度調査会会長、元厚生労働大臣）による「胸部外科医療を含めた、これからのが国医療政策について」、木村怜央さん（株式会社Vivixy、三重大学医学部休学中）による「AIが変える医療～なぜ三重大の医学生が、医学部を飛び出してAIベンチャーを起業したのか～」、教育講演として松岡義和先生（岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 麻酔・蘇生学分野）による「ハイリスク手術の術前評価と周術期管理」を企画しました。

初日の午前は専門医取得前の研修医、修練医による症例報告をアワード選出に当て、その他、横断領域プログラムとして「胸部外科手術における術中合併症とトラブルシューティング」、心臓血管外科領域で「急性大動脈症候群に対する医療体制や治療対応」、「入念に術前戦略を要した先天性心疾患に対する手術」、「新しい技術、画像検査を用いた心臓血管外科分野での進歩」、「TAVI時代における大動脈弁狭窄症に合併した虚血性心疾患の治療戦略」、「心筋梗塞後中隔穿孔（VSP）／Acute Coronary Syndrome (ACS)／重症心不全を來した心疾患に対するMechanical circulatory support (MCS) を含んだ治療戦略」、「B型大動脈解離に対するpreemptive TEVAR」、「心臓血管外科での人工物感染に対する治療戦略」、「MICS手術における安全管理」、「僧帽弁形成術でのリング選択とその根拠」、「小児補助循環 ECMO管理の工夫」、呼吸器外科領域で「Reduced port VATS, RATSの現状と課題」、「Under 40呼吸器外科医による複雑区域切除の実際」、「原発性肺癌に対する術前導入治療後手術の実際」、「10年後に残したい私のこだわりの手術」、「胸腔ドレナージでできること」、「原発性肺癌に対する薬物



治療後のサルベージ手術について、「肺部分切除再考～呼吸器外科入門手技を見直す～」、食道外科領域で「食道外科領域における免疫チェックポイント阻害剤の役割と課題」、「食道癌周術期合併症に対する対応と対策」、「食道癌ロボット手術の取り組みと手技の工夫」、JATS-NEXT関西支部企画として「若手外科医の育成／トレーニングの理想と現実」を上級演題主題として最新の知見をもとに活発な討議が行われました。本格的に始まった働き方改革のもと、チーム医療の推進、先進医療の機能的集約化、関連分野間の密な連携へ向けて、若手外科医や外科医を目指す医学生、研修医をはじめ若手、中堅医師が主体的に発言しやすいセッション構成であったと思います。

梅雨の時期での開催であり、天候を心配しておりましたが快晴（真夏を思わせる危険な暑さでした）に恵まれ、県内外にわたる交流を行える楽しい会になったと自負しております。また一年以上前の準備段階から企画、運営に多大なるご協力をいただきました三重大学大学院医学系研究科胸部

心臓血管外科学教室、消化管・小児外科学教室の皆様方には本紙面をお借りして改めて深謝申し上

げます。

第57回日本医学教育学会 Best Student Awardを受賞して

心臓血管外科 岡 部 純 恵



この度は栄誉ある賞を頂戴し、大変うれしく思います。研究遂行にあたってご指導、ご協力を賜りました鳥羽修平先生をはじめとする本学胸部心臓血管外科の先生方、研究にご協力くださった先生方、そして、本研究の根幹をなす評価装置を共同開発してくださった橋本電子工業株式会社の皆様に、厚く感謝いたします。

本研究は、最も基本的な外科手技の一つである結紮について、定量評価装置を開発し、経験年数に応じた手技の差異を検討したものです。結紮を速く正確に行なうことは、優れた外科手術に重要です。その習得や評価のためには結紮の質を客観的に評価することが必要ですが、結紮手技の詳細な定量評価の報告は限られていました。

本研究では、私たちが特許出願した結紮の新規定量評価手法を元に、橋本電子工業株式会社（三

重県松阪市）と共同で定量評価装置を開発しました。本装置は、結紮時に対象にかかる力（結紮の安全性）に加え、結紮の緩み（有効性）、結紮にかかる時間（迅速性）を同時に測定し、結紮を定量的に評価することができます。これにより結紮の質の包括的な評価が可能となりました。医学生、初期研修医、心臓血管外科、呼吸器外科の先生方、計25名の先生方に協力してい

ただき、結紮手技の計測を行い、経験年数に応じた結紮の差異を検討することができました。

本研究の成果により従来の結紮理論を科学的に検証する事が可能となり、今後、優れた結紮のトレーニング法の確立や、より優れた手術器械の開発に貢献できると考えております。



日本化学療法学会Young Challenger Awardを受賞して

附属病院薬剤部 講師 朝居 祐貴

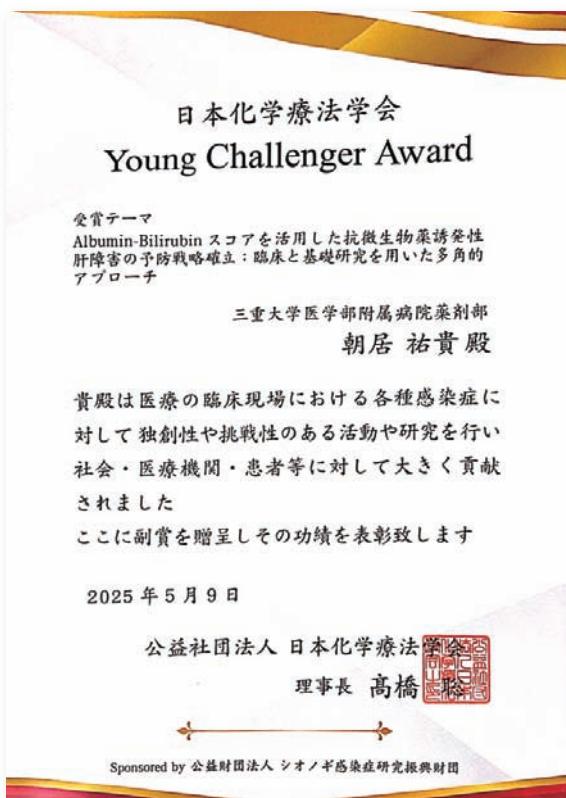


この度、「日本化学療法学会Young Challenger Award」を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。本賞は、日本の感染症対策に寄与できる人材の育成に貢献することを目的として、40歳未満の学会会員から選考されます。2025年度の受賞者としては、私を含めた5名が選出されました。今回の受賞テーマであります「Albumin-Bilirubinスコアを活用した抗微生物薬誘発性肝障害の予防戦略確立：臨床と基礎研究を用いた多角的アプローチ」について紹介させていただきます。

薬物投与により誘発される肝障害（薬剤性肝障害）は、上市されてから販売中止に至ることや、緊急安全性情報を発するケースが少なくありません。私は、高齢者や肝硬変などの肝予備能が低下した患者では、薬剤性肝障害の発現リスクが高いと仮説を立て、肝予備能指標が抗微生物薬の関連する肝障害の予測指標として活用できるのではないか？と考え、電子カルテデータを用いた臨床研究を開始しました。その結果、Albumin-Bilirubinスコアから見積もられる肝予備能の低下は、抗微生物薬7種類の関連する肝障害の予測に有用であることを明らかにしました。Albumin-Bilirubinスコアは、血清アルブミン値と総ビリルビン値から算出できるため、全ての医療従事者が簡便かつ統一した評価が可能です。そのため、抗

微生物薬の投与前に薬剤性肝障害のリスクを評価し、重篤化予防へのリスクヘッジの一助になると考えております。さらに、肝予備低下に伴う肝障害の発現メカニズムを明らかにし、予防薬が同定できれば、より有効な肝障害の重篤化予防策を講じることができると考えられます。現在、培養細胞や肝疾患モデルマウスを用いた基礎研究を進めています。また、ヒトでの肝障害予防薬の有用性を検証するために、医療ビックデータの活用も視野に入れ、他施設の研究者と議論を行っております。今後もエビデンス構築に向けて日々研究を行っていき、医療の発展に貢献していきたいと考えております。

最後に、本研究に際して、終始あたたかく御指導、御鞭撻を賜りました三重大学医学部附属病院



薬剤部・医学研究科 臨床医学系講座 臨床薬剤学
教授 岩本卓也博士に心より感謝致します。肝疾
患モデルマウスの作成に際して、免疫染色にご尽

力いただきました鈴鹿医療科学大学 薬学部・薬
学研究科 教授 郡山恵樹博士、大井勇秀学士に
深甚なる謝意を表します。

一般社団法人日本医療薬学会 第98回医療薬学公開シンポジウムを開催して

三重大学医学部附属病院薬剤部 岩 本 卓 也



2025年8月23日（土）、三重大学医学部 臨床第2講義室において、第98回医療薬学公開シンポジウムを対面形式で開催いたしました（主催：日本医療薬学会）。参加者は57名（病院薬剤師41名、薬局薬剤師7名、大学教員3名、その他6名）でした。本シンポジウムのメインテーマは「チーム医療を支える薬剤師の活躍とエビデンス構築」とし、そのもとで特別講演およびシンポジウム企画いたしました。

和歌山県立医科大学薬学部 社会・薬局薬学研究室 教授 岡田 浩先生による特別講演では、薬剤師が主体となって医療現場でエビデンスを構築する意義について解説がありました。具体例として、

地域薬局で実施された「COMPASSプロジェクト」が紹介されました。2型糖尿病患者に対して薬局における短時間の生活習慣改善支援を実施し、薬剤師の介入によってHbA1cの改善が確認されました。また、高血圧患者を対象とした臨床試験（COMPASS-BP）では、減塩指導による血圧改善効果が示されました。このように薬剤師の介入が患者アウトカムに大きな影響を与えることが明らかとなり、高齢化社会を地域で支える上での薬剤師の重要な役割が強調されました。さらに、患者指導では、間食の消費に必要な歩行時間や、1日1gの減塩による血圧低下（約1mmHg）などの定量的指標をパンフレットに記載することで、患者の治療参加意欲が向上することも紹介されました。加えて、高齢者を多く抱える地域医療においては、地域でのソーシャルキャピタル構築が不可欠であり、患者の良き相談相手・医療支援者と



して薬剤師の活躍が一層求められることも示されました。

シンポジウムでは、「各領域における専門性を生かした介入と実践例」をテーマに、がん領域、循環器・腎臓領域、集中治療・感染領域、地域医療の各領域にて活躍されている先生方に講演をしていただきました。それぞれの講演では、日常業務から派生したクリニカルクエスチョンを構造化して臨床研究を行い、エビデンスを構築するプロセスと成果が紹介されました。総合討論では、臨床研究を推進するためには、論理的思考力や定量的評価の視点に加え、他職種・他施設との連携や

信頼関係の構築が重要であることが共通の認識として示されました。さらに、薬局薬剤師が臨床研究に積極的に取り組むために必要なスキルについて質問があり、参加者の関心の高さもうかがえました。本シンポジウムが参加者の意識変容を促す契機となったと感じられました。

最後になりましたが、本公開シンポジウムの開催にあたり、特別講演およびシンポジウムをご担当いただいた演者の先生方、企画・運営にご尽力いただきました三重大学医学部附属病院薬剤部のスタッフ、日本医療薬学会事務局の皆様に厚く御礼申し上げます。

第56回日本膵臓学会大会若手award最優秀賞を受賞して

三重大学医学部附属病院 栄養診療部 田辺 紗弥香



この度、2025年7月25日（金）にホテルニューオータニ東京で開催されました第56回日本膵臓学会大会若手award「医学生・研修医・メディカルスタッフ・セッション」において最優秀賞をいただきましたので、ご報告させていただきます。

演題は「膵がんグルメディカル教室の満足度向上に向けた取り組みについて」です。以下、発表内容について簡単にご紹介いたします。

膵がんグルメディカル教室は、膵がん患者および家族への情報提供と交流を目的とした当院外来

棟4階のグルメディカルスタジオ（キッチンスタジオ）にて実施している集団栄養指導です。肝胆膵・移植外科の岸和田昌之准教授とともに2015年から開始し、これまで院内で11回、院外で2回開催してきました。開催当初は、医師による講義・膵酵素消化薬実験、管理栄養士による治療食の調理実演、情報交換会の場として調理実習・試食会の内容で実施しており、COVID-19を経て、2024年に感染対策を講じながら再開しました。

今回は、膵がん患者および家族に対する食支援として患者と家族の味の感じ方に注目し、開催した2025年の膵がんグルメディカル教室の取り組みについて報告させていただきました。膵がん患者の方は治療の影響で味覚障害を訴える方が多く、患者と家族間で食事に対する齟齬が生じやすい傾向にあります。患者と家族間の味覚の違いに対する理解を深めるため、これまでの開催内容に味覚テストを加え、COVID-19の影響で実施を見送っていた試食会も再開しました。味覚テストは、

「5段階の濃度に設定した砂糖水・クエン酸水・塩水を用いた味覚の感度評価」と「ソルセイブ[®]を用いて塩味の閾値評価」を患者および家族が行い、実施後患者からは「味覚異常に気付いた」との感想や、家族からは「膵がん罹患後、患者から食事がおいしいと聞かなくなったり」との気づきの声を頂いております。また、教室終了後に本教室の評価のためアンケート調査を行った結果、本教室の取り組みが患者と家族間の味覚の違いに対する理解を深め、食支援として効果的であったと報告させていただきました。

今回、このような栄誉ある賞を賜り、改めて膵がんグルメディカル教室に携わることができ、大

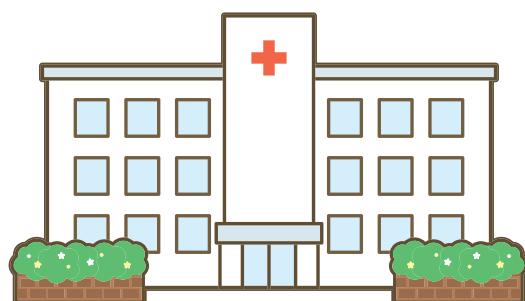
変光栄なことだと実感いたしました。また、初めて学会での発表を経験し、自身の未熟さを痛感するとともに、大きな刺激を受ける貴重な機会となりました。本教室は、次回開催を2026年1月末に予定しております。今後とも膵がん患者および家族への支援の一助となるよう尽力していく所存です。

最後に、膵がんグルメディカル教室に携わる機会を頂いた肝胆膵・移植外科の岸和田昌之准教授、発表の機会を与えてくださった同科の水野修吾教授、これまで本教室を運営してきた諸先輩方に感謝申し上げます。

学位記授与式

令和7年7月22日（火）、医学部附属病院 研究科長室において、学位記授与式が挙行され、平山研究科長より3名の方々に三重大学博士（医学）の称号が授与されました。

令和7年9月25日（木）三翠ホール（小ホール）において学位記授与式が挙行され、伊藤学長より8名の方々に三重大学博士（医学）、2名の方に三重大学修士（看護学）の称号が授与されました。



三重大学医学部の理念

Mission and Core Principles of Mie University Faculty of Medicine

確固たる使命感と倫理観をもつ医療人を育成し、豊かな創造力と研究能力を養い、人類の健康と福祉の向上につとめ、地域および国際社会に貢献する。

Mie University, School of Medicine aims to raise medical personnel with a steadfast sense of mission and ethical view, and to cultivate in it students and faculties both rich creativity and research capacity.

The school will strive for development of human health and welfare and contribute to regional and international society.

—編集発行—

三重大学 医学部ニュース編集委員会

〒514-8507 津市江戸橋2-174

国立大学法人 三重大学医学・病院管理部

TEL. 059(232)1111(代表) FAX. 059(232)7498

E-mail : s-hisyokoho@mo.medic.mie-u.ac.jp